
ポケットモンスター クローバー ～とある少女の冒険記～

白波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター クローバー ～とある少女の冒険記～

【Nコード】

N4943BA

【作者名】

白波

【あらすじ】

10歳になった少女ユリはポケモンをもらいそのポケモンたちと共に風の向くまま気の向くままヨツバ地方を旅をする…これはそんな物語です。※舞台はオリジナルの地方です。

第1話 旅立ち 初めてのポケモン

どこかの広い平原の真ん中に少女とその少女の母親らしき人物が立っている。しばらく少女は平原を走り回っていたが何かを見つけようでじっと草むらを見つめる。

「なにか見つけたの？」

母親の問に少女は一点を指差し

「これは何？」

と聞く。少女が指差した先にはたくさんの草が生えておりその中に四葉のクローバーがあつた。

「それは四葉のクローバーよ……見つけた人は幸せになれるの……」

「ほんとうなの！ だったら私幸せになれるんだ！」
と言いながらはしゃぎだした。

「もちろんよ……。」

そんな光景を母親はにこやかに眺めていた。

π

目覚まし時計の電子音で10歳の少女ユリは瞼を開ける。

「また……あの夢だ……」

この夢を見るのは何回目だろうか？ここ1週間ぐらいこの夢ばかり見る。

ユリはゆつくりとした動作で体を起こすと下へ降りて洗面所で顔を洗うとようやく眠気が消えてきた。朝食を食べると自分の部屋に戻りカバンの中身を確認する。

「忘れ物はないわね……。」

確認するようにそうつぶやくとカバンを持って下に降りる。

「それじゃあ行ってくるね。」

ユリが言うと父が心配そうに

「おう：それにしてもユリはもう10歳か：早いもんだな：研究所までの道はわかるよな？」

と尋ねる。

「私はそこまで子供じゃないわよ！それじゃあ行ってきます！」

元気よく家を出て行ったユリの背中を父は心配そうに見送る。

「ユリ：いろんなポケモンや人と会って成長して戻ってこいよ：。」
そう言うと父は家の中に戻りいつも座っているソファーに腰かける。

ヨツバ地方 ナギサ地域 シンメタウン

シンメタウンは街の中心にあるポケモン研究所がありそこを中心
にちらほらと家が建ちならぶ緑豊かな小さな町である。町のはずれ
にあるユリの家から中心にある研究所までもそこまで時間はかから
ない。いつもはゆっくりと歩いてこの風景を楽しんでいるユリも今
日ばかりは早く自分のポケモンがほしいがために研究所へ続く道を
全力で走っている。

シンメタウン ポケモン研究所

「すいません：。」

ユリが息を切らしながら中に入って行くと

「あなたが今日旅立つ新人トレーナーさん？」

と言いながら白衣を着た女性が出てきた。

「そうです：私はユリと言います：。」

ユリが自己紹介すると女性は

「ユリちゃんね：私はポケモン研究家のサクライよ：主に研究して
いるのはヨツバ地方のポケモンの生息域についてよ：。」

と自己紹介した。

「ヨツバ地方のポケモンの生息域ですか？」

「ええ：ご存じのとおりここヨツバ地方は大きく四つの生息域に分

かれていてそれぞれハウエン、シンオウ、カントー、ジョウトそして最近確認されたばかりなんだけど四つの島に囲まれた中央に浮かぶ島でイッシュ地方のポケモンも確認されたの…だから私はなぜこのような形で様々なポケモンがこのヨツバ地方に生息しているか研究しているのよ…もしかしたらもっと別の島でここまで上げた五つの地方以外に生息するポケモンがいる可能性だってあるし…それだね…」

熱く自分の研究について語りだしたユウコ博士の横から助手らしき男性が出てきて

「博士はいったん自分の研究について語りだすときりがないからここにきて。」

と言いながら手招きをした。

「はい。」

ユリは助手について行ったがサクライ博士はそのことに気づかないのかいまだ自分の研究について語っている。

しばらく歩くとモンスターボールが三つ真ん中のテーブルに置いてある部屋に出た。

「ヨツバ地方では地域ごとに初心者用ポケモンが異なっています。ちなみにここナギサ地域ではハウエン地方で生息が確認されているポケモンが多く分布しているので初心者用ポケモンはくさタイプのキモリ、ほのおタイプのアチャモそしてみずタイプのミズゴロウ…この三体から決めてもらいます。」

助手は説明を終えると三体のポケモンをモンスターボールから出す。

「どのこもかわいい!」

三体から選ぶなんて結構大変なんだな…キモリはくさタイプだからすばやいの…かな?それでアチャモはひよこみたいでかわいいしミズゴロウはこのひれが最高ね…どうしよう…迷っちゃうわ…。

ユリが三体のポケモンを前に悩んでいるとやっとユリがいなくな

ったことに気付いたのかサクライ博士が急いで部屋に入ってくる。

「それでパートナーを誰にするか決まった？」

ユウコ博士が聞くとユリは首を横に振る

「いえ…どのこも捨てがたくて…。」

「そうね…大事なパートナーですものね…じっくり考えた方がいいわ…決まったら呼んで頂戴。」

そういう残しサクライ博士は助手を連れて部屋を出て行った。

それから小一時間なやんだ末ユリはアチャモを連れていくことにした。

「アチャモにするのね！これがアチャモのモンスターボールと…ポケモン図鑑…あとはモンスターボールね…アチャモを大事にしてね。そうそう…ユリちゃんは旅に出る上で目標とかあるの？」

アチャモを抱えながらモンスターボールとポケモン図鑑を受け取ったユリは

「旅の目的ですか？そうですね…私は風の向くまま気の向くままヨツバ地方を歩いてみたいと思います。」

と答えた。

「風の向くまま気の向くままね…。」

とサクライ博士が言うユリは

「まずかったですか？」

と聞き返した。するとサクライ博士は少し焦った様子で

「別に悪いわけじゃないわよ！たいていの子はこの質問に対してポケモンリーグを制覇するだのトップコーディネーターになるだの言ってたから…。」

と言った。

「やっぱりちゃんとした目標がないとだめですかね？」

ユリの質問にサクライ博士は

「まあ人それぞれだからそれも旅している途中で自分のやりたいことと見つければいいんだしあなたの行っていることも立派な旅の目的

よ！」

と言った。

「わかりました！それではそろそろ行きたいと思います。いろいろとありがとうございました。」

ユリは頭を下げてから研究所の玄関扉を開けて外にでる。

「ユリちゃん！なにかポケモンのことについて困ったら電話してくれれば私の答えられることだったら答えるわよ！」

とサクライ博士が言う。ユリは振り返り

「はい！その時はまたお願いします！」

と答えてまた歩き出す。

「さてと…最初はどっちに行く？」

と肩に乗っているアチャモに話しかけるとアチャモは夕日の方向を見つめた。

「よし！じゃあまずは西の方にある町に行こうか！」

とユリが言う。アチャモはうれしそうに肩に乗ったままジャンプした。

「風の向くまま気の向くままね…。」

サクライ博士がユリの背中を見ながら言う。助手は

「なにか気になることでもあるんですか？別にポケモンと入れるだけでもいいって人や風の向くまま気の向くまま旅するって答えた人もたくさんいたのに。」

と聞いた。

「いやね少し似てるなと思って…。」

「似てる？」

助手が聞き返すとサクライ博士はどこか遠くを見ながら

「ええ…昔会ったある女の子にね…ほんとにそっくり…。」

と言って研究所の方を向く

「懐かしいわ…あの子はどうしてるのかしら…。」

そう言う。サクライ博士は研究所の中へ入って行った。

第1話 旅立ち 初めてのポケモン（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

事前に書いておきますがポケモンバトルにつきましては技の数の上
限はなし（ただしバトルフロンティアなど特殊な施設に挑戦する場
合はあらかじめ使う技を四つ選ぶ）です。

これからよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4943ba/>

ポケットモンスター クローバー ～とある少女の冒険記～

2012年1月13日19時51分発行